# CURRENT ACTIVITIES

## 現在の活動・イベント

# 比叡レガッタ

## HIEI REGATTA

比叡レガッタは、1969 年京都ヨットクラブと琵琶湖ヨット倶楽部の定期戦として始まり、今日まで毎年欠かさず開催され、本年度で第 44 回を迎えます。

この比叡レガッタが始まる年（1969 年）の前年に、ヨーロッパ級が西之園氏の手によって導入され、当時の BYC、KYC の若手メンバーの多くが艇を建造し、今まで沈滞ぎみであった活動が活発になったと年で、KYC の若手が発起人となり、BYC とクラブ対抗レースが企画されました。

レースは、ホストクラブを担当し、艇種は、お互いが持つ艇を出し合って､行います。当初はシーホースとヨーロッパの組合せ、近年では、シーホースとレーザーで行うのが通例となっています。レース後は趣向を凝らしたパーティでさらに親睦を深めるといった形で初秋の一日を楽しみます。

２００５年第 37 回大会からは、湖翔ヨット倶楽部も加わり、３クラブ対抗レースとなり、より盛り上がりを見せています。今までの成績は、別表にまとめています。初期の頃の BYC 常勝時代がありましたが、近年は成績は拮抗しているようです。成績にこだわらず、いつまでも続けていきたいイベントです。

第 43 回大会　（2011 年）

写真集のページへ

第 43 回大会　（2011 年）

## ■ 比叡レガッタの優勝杯（舵輪）の歴史

東田　渉

K YC に大学生で横山君という若いクラブ員がおり、これまた BYC にも負けず劣らず当時、低迷活動状態であった KYC 内で若手一人で孤軍奮闘し、クラブ活動に頑張っているという噂を得て、交流を持ったのがその後発展し、第一回比叡レガッタが両クラブ対抗で盛大に行われたのが 1969 年のことです。当時、我ら発起者五人で、優勝杯に充てる舵輪を捜しまわり、数日間 , 値段交渉の為通い続け、値切りに値切って、１２０００円でやっと手にいれたあの骨董屋は未だ河原町丸太町下った西側に在るのでしょうか？

比叡レガッタの優勝舵輪

写真集のページへ

第 1 回大会（1969）

第 1 回大会（1969）

第 2 回大会（1970 年）

第 2 回大会（1970 年）

第 3 回大会（1971 年）

第 3 回大会（1971 年）

第 3 回大会（1971 年）

第 3 回大会（1971 年）

第 3 回大会（1971 年）

第 3 回大会（1971 年）

■ 比叡レガッタ　成績表

| 回 | 年月 | 年 | ホスト | 優勝 | ２位 | ３位 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 1969.08 | S44 | KYC | BYC | KYC | - | |
| 2 | 1970.09 | 45 | BYC | KYC | BYC | - | |
| 3 | 1971.08 | 46 | KYC | BYC | KYC | - | |
| 4 | 1972.09 | 47 | BYC | BYC | KYC | - | BYC 創立５０周年　BH |
| 5 | 1973.10 | 48 | KYC | BYC | KYC | - | |
| 6 | 1974.09 | 49 | BYC | BYC | KYC | - | レース後　琵琶湖ホテル |
| 7 | 1975.09 | 50 | KYC | BYC | KYC | - | |
| 8 | 1976.08 | 51 | BYC | BYC | KYC | - | レース後　琵琶湖ホテル |
| 9 | 1977.09 | 52 | KYC | BYC | KYC | - | |
| 10 | 1978.07 | 53 | BYC | BYC | KYC | - | |
| 11 | 1979.09 | 54 | KYC | BYC | KYC | - | |
| 12 | 1980.05 | 55 | BYC | BYC | KYC | - | |
| 13 | 1981.10 | 56 | KYC | 引き分け | | - | |
| 14 | 1982.10 | 57 | BYC | KYC | BYC | - | BYC 創立６０周年　艇庫 |
| 15 | 1983.09 | 58 | KYC | BYC | KYC | - | |
| 16 | 1984.09 | 59 | BYC | KYC | BYC | - | |
| 17 | 1985.09 | 60 | KYC | BYC | KYC | - | |
| 18 | 1986.10 | 61 | BYC | KYC | BYC | - | |
| 19 | 1987.10 | 62 | KYC | KYC | BYC | - | |
| 20 | 1988.09 | 63 | BYC | BYC | KYC | - | 第２０回前夜祭ミシガン |
| 21 | 1989.09 | H1 | KYC | BYC | KYC | - | |
| 22 | 1990.10 | 2 | BYC | BYC | KYC | - | |
| 23 | 1991.09 | 3 | KYC | BYC | KYC | - | |
| 24 | 1992.09 | 4 | BYC | KYC | BYC | - | BYC 創立７０年ビアンカ |
| 25 | 1993.09 | 5 | KYC | KYC | BYC | - | |
| 26 | 1994.09 | 6 | BYC | BYC | KYC | - | |
| 27 | 1995.09 | 7 | KYC | BYC | KYC | - | |
| 28 | 1996.09 | 8 | KYC | KYC | BYC | - | |
| 29 | 1997.09 | 9 | KYC | KYC | BYC | - | |
| 30 | 1998.09 | 10 | BYC | BYC | KYC | - | 第１回　SAIL おおつ |
| 31 | 1999.09 | 11 | KYC | KYC | BYC | - | |
| 32 | 2000.09 | 12 | BYC | BYC | KYC | - | |
| 33 | 2001.09 | 13 | KYC | BYC | KYC | - | |
| 34 | 2002.09 | 14 | BYC | BYC | KYC | - | BYC 創立８０周年　BH |
| 35 | 2004.04 | 15 | BYC | KYC | BYC | - | |
| 36 | 2004.09 | 15 | BYC | BYC | KYC | - | |
| 37 | 2005.09 | 17 | KYC | KSYC | KYC | BYC | KSYC　初参加 |
| 38 | 2006.09 | 18 | BYC | KSYC | BYC | KYC | |
| 39 | 2007.09 | 19 | KSYC | BYC | KYC | KSYC | |
| 40 | 2008.09 | 20 | KYC | KYC | KSYC | BYC | 第１０回 SAIL おおつ |
| 41 | 2009.09 | 21 | BYC | BYC | KSYC | KYC | |
| 42 | 2010.09 | 22 | KSYC | KYC | BYC | KSYC | |
| 43 | 2011.09 | 23 | KYC | BYC | KYC | KSYC | |
| 44 | 2012.09 | 24 | BYC | ? | ? | ? | 創立９０周年ミシガン |

備考：通算 BYC: 27 勝、KYC:13 勝、KSYC:2 勝

# SAILおおつ

## SAIL OTSU

持回りトロフィー

参加賞のＴシャツ

SAIL おおつは、ヨットの振興と普及を図るべく、ディンギーならどんな艇種でも参加可能なオープンヨットレースで、1998 年大津市制 100 周年記念行事の一環として以前より主催事業で開催してきたビワコ・カインド・レガッタを発展的に継承する形で、京都市新聞社の主催を得て、毎年開催しており、本年で第 14 回大会となります。

大津市制１００周年への取組募集があり、本田氏よりイベントを計画してみては、との提案で検討が始まりました。当時、山田市長に１００艇のヨットのパレードを「なぎさ公園」に沿ってと話しましたら、諸行事に加えて是非となりました。

ところが、なぎさ公園沿いは建物が隣接し、風の条件が悪く、岸辺は藻が一杯でセーリングは難しい状況でしたが、BYC のスタッフで、祝賀のセーリングパレードが出来ました。

また　これをきっかけに当時の京都新聞社の坂上社長に　琵琶湖ヨット倶楽部が１９７３年から単独で開いてきました「琵琶湖カインドレガッタ」を新聞社主催でとお願いし、１９９８年、名前を「SAIL おおつ」として発足しました。新聞社が主催のヨットレースは他になく、日本セーリング連盟の役員会へも報告し、大いに関心を得ました。

新聞社では開催予告やレース後の報告など、毎回大きい紙面を割いていただきました。第１０回の開催までは１ページのカラー刷りでレースの写真を出してもらい、レースに参加している人たちのスナップ写真が出て大変好評でした。

早いもので　今年で第１４回を迎え、８月２６日（日）夏休みの最後の日曜日に開催し、シニアからジュニアまで　大勢の参加で湖上をにぎわしました。レース後の成績発表と表彰に続いて　アフターパーティと抽選会で和やかなヨットマンの交流の場がこのレースの特色です。

写真集へのリンク

- ■ 第 1 回（1998）
- ■ 第 2 回（1999）
- ■ 第 3 回（2000）
- ■ 第 4 回（2001）
- ■ 第 5 回（2002）
- ■ 第 6 回（2004）
- ■ 第 7 回（2005）
- ■ 第 8 回（2006）
- ■ 第 9 回（2007）
- ■ 第 10 回（2008）
- ■ 第 11 回（2009）
- ■ 第 12 回（2010）
- ■ 第 13 回（2011）
- ■ 第 14 回（2012）

◆ラジオ番組出演（KBS ハーバーラジオ：青木：1998 年）⇒

2011 年　スタートシーン

2011 年　集合写真

## ■ SAIL おおつの企画　　青木 英明

SAIL おおつ企画・実施に至る経過を以下に述べます。

1998 年が大津市制 100 周年として記念イベントの募集がなされており、これへの応募が何かの形でできないかとの提案が本田氏から出されました。

日経デザイン誌の記事の中で、ドイツのキールウィークに関する記事があり、ヨットレース週間にヨットと街が一体になった様子が記述されていました（下記）。

日頃、我々がセーリングを楽しむ中で、ただ単に利己主義的に一般とは関わり無い世界で活動しています。一方、一般の市民の方々も湖面を帆走するヨットを大津の象徴ともイメージすべく感じているものの（観光案内にはヨットの絵が多くかかれている）、実際に接する機会は少ない状況です。

我々もこの素晴らしいセーリングの世界を隔離された排他的なウォータースポーツではなく、街から受け入れられる存在にしたい。そのことが、最近沈滞気味のセーリングスポーツの底辺を広げるきっかけにならないか？と考えました。

大津市は公園として整備された美しい湖岸を有し、大抵の天候でも安全に帆走できるため、ここでレースを行えば、市民もレースを手に取るように見れてヨットの素晴らしい世界を感じていただけるのでは、と考えたわけです。

セーラーにとっては、面白くないコースかも知れませんが、湖岸の観客席から、声援が聞こえれば楽しめる。年に一度はそういったパレードレースがあってもいいな、と思ったわけです。

長谷川会長の計らいで、大津市制 100 周年行事の一環として、また、主催に京都新聞社を迎え、充実した体制での開催となりました。

「街との共生」のテーマで始め、当初は大変多くの参加を集めましたが、実際には、宣伝活動もうまくなく、観客も思ったほど集まらない、コース沿いでは藻が多く帆走しにくく、選手にとっては困難な状況もあり、第 5 回の本年からは、柳ヶ崎の公園が整備されたこともあり、カインドレガッタと同じように柳ヶ崎沖にレース海面を移し、開催することになりました。しかし、「街との共生」ということは念頭において、楽しいイベントとして継続していきたいものと考えます。

日経デザイン記事（キールウィークデザインコンペ）

SAIL おおつ　におの浜からの光景

京都新聞　カラーページで掲載（一部）

7　第3種郵便物認可　京都新聞　2000年（平成12年）10月17日　火曜日

鮮やかな帆満開　比叡の山並みを背に、秋風を慎重に読んで進むヨット

# 帆に秋風 湖上疾走

## 琵琶湖で「SAILおおつ」

## 波を切り白熱レース

巧みな操船技術　第1マークを巧みに回り快走するOPの少年ら

ゴールは目の前　ゴール前で競りあう選手ら

届け！熱い声援　湖上に向かって、熱い声援を送る市民

風をつかまえろ　風向きにあわせて指示を出す選手ら

2000 年

第3種郵便物認可　京都新聞　2001年（平成13年）10月23日　火曜日　8

## 琵琶湖で「SAILおおつ」

### 風に乗って白熱レース

岸辺から風を受けて走るヨットの姿が楽しめるヨットレース「SAILおおつ」（京都新聞社主催、琵琶湖ヨット倶楽部主管）が、大津市・なぎさ公園沖の琵琶湖で21日、開かれた。冷たい雨が降るあいにくの天気だったが、参加者らは巧みに帆を操った。

3年前の大津市制100周年を記念して始まったレースは、今年で4回目。だれでも参加できる一般の部と、中学生以下の子どもが参加するオプティミスト（OP）の部があり、合わせて51艇が参加。湖上を彩った。

レースは午前11時にスタート。沖合には琵琶湖に多いという安定した北東の風が吹き、風をはらんだ白い帆があっという間に白い列をつくった。コースが最短で湖岸から約50㍍と近いため、OPに出場した選手の家族らが、湖岸からレースを見守った。

# 巧みな帆走 湖上を彩る

次々ターン　慎重に風を読み、マークを回る各艇

力いっぱい　体を倒し、懸命に帆をたぐる

息びったり　呼吸を合わせて、セールを操る選手たち

やった1番　トップでゴールし、笑顔を見せる

2ショット　琵琶湖の名物、観光船「ミシガン」を背にしたヨット

2001 年

9　第3種郵便物認可　京都新聞　2004年（平成16年）11月3日　水曜日

# 風の歌を聞け

## 秋の山々背に、44艇琵琶湖に競う

SAILおおつ

琵琶湖に吹き下ろす子風を受けてセールを絞っまず、四十四艇のヨットが湖面を滑走した。十月三十一日、大津市柳が崎の中合を南端とするヨットレース（SAILおおつ）（京都新聞社、実業譜まさきる主催）。出場者は、一昨夏の京都を皮切りの近畿一円からの出場者は、一秋の深い冷え始めた山々を背に、日本一の湖で、風と一体となった。

SAILおおつは、大津市の市制五十周年を記念して始まり、湖でも、どんなヨットでも出場できる「市民レース」として人気がある。今回も、国体・国際レースの経験から、初心者、家族連れまでさまざまな顔ぶれが集い、競技の「レース仕様艇」から、軽快の「九三〇年代に製造された木製の「クラシック艇」まで、多彩なヨットが湖面を彩った。

二レース人が湖で順位を競ったが、午前十一時半にスタートした第一レースは、この季節にしては珍しい微風で、制限時間内にゴールできたのは、わずかに七艇だった。午後からの第二レースは、徐々に風が強まり、まずまずのコンディションに、各艇は伸び伸びと設けられたコースで、風向きを読みながら、かじとセールを操り、湖面を滑るように疾走した。



クラシック　1930年代に製造された木製ヨットの出場も、市民レースならでは



滑走　琵琶湖を渡る風をセールいっぱいに受けて、加速するヨット



風よ　うるわしろ（出発を待つ）、風を待つ



シュート　鮮やかなセールさばきで折り返しのマーク（左端）を回り、トップ争いを繰り広げるレース仕様の2艇



笑顔　風がやさしく気になれず、マイペースでレースを楽しむ家族連れ

2004年

第3種郵便物認可　京都新聞　2008年（平成20年）8月29日　金曜日　10

# 波を滑り 風と溶け合う

第10回 SAILおおつ

ヨット好きが琵琶湖に集まって、湖風を楽しむ、第十回の記念レースとなった「SAILおおつ」（主催・京都新聞社、主管・琵琶湖ヨット倶楽部、京都ヨット倶楽部、湖翔ヨット倶楽部）。七十七歳のベテランや高校生、小学生、サラリーマンら七十七人が、大津市柳が崎沖で、波しぶきを上げてセーリングを楽しんだ。

レースで目一杯の練習成果を試すのと同時に、琵琶湖でヨット愛好家が交流するのが目的。前日の雨は上がり、ほどよく風が吹き始めて、レースはスタート、子ども用のヨットも含め計七十七艇が、湖上に設けた三角形のコースを周回した。白い帆に風をはらませ滑走するヨットもあれば、のんびりと湖上の風と遊ぶようなヨットもあり、参加者たちはそれぞれの琵琶湖の夏を味わった。



疾走　巧みな操縦で湖面を滑走するヨット（24日、大津市柳が崎沖の琵琶湖）



出発　一斉にスタートする参加者ら



操船　小さいヨットだが、操船する子どもたちは真剣



ぐらり　おっとっと！コーナーリングで勢い余って



快調　風を受け、湖面を走る気持ちよさ

2008年

写真集のページへ

2011 SAIL おおつのシーン

写真集のページへ

2010 SAIL おおつのシーン

## ■ ヨットハーバーの存続を求め、湖上帆走デモを実施　　J-SAILING 誌より抜粋（2010 年 8 月）

昨年１２月６日、大津市におの浜の湖岸沿いを約１５０艇のヨットを集め、セーリングによる抗議デモ行進を行いました。ヨットでデモ行進なんて恐らく日本でも初めてではないかと思います。その顛末を報告いたします。

昨年８月、県財政困窮の中、滋賀県行政経営改革委員会から「外郭団体および公の施設の見直しに関する提言」が滋賀県知事に提出され、この中で、滋賀県立柳が崎ヨットハーバーが、「民間への売却、不調の場合は平成２２年度の指定管理終了後に廃止すべき」との報告がなされました。

現在の県営柳が崎ヨットハーバーは、1962 年（昭和 37 年）に竣工しましたが、元々は日本ヨット倶楽部（1922 年創設、後に琵琶湖ヨット倶楽部に改称）が 1933 年（昭和８年）にこの地に艇庫を構えたのが最初で、日本で初めて IYRU 競技規則を翻訳発行するなど、昭和初期から活発にヨットレースが行われてきました。いわゆる日本ヨット競技のルーツでもある大変重要な場所なのです。以降、この地からオリンピックセーラーを含め、多くの優秀なヨット乗りを輩出してきました。

この危機に直面し、この地がマンションなどに変わってしまう姿を想像するに、何としても反対の声を伝えるべきとの声が上がりました。滋賀県セーリング連盟からも存続を求める嘆願書や署名活動を行い折衝がなされました。我々利用者としても何ができるのか皆で協議する中、抗議デモをヨットでやってみようということになりました。大津市におの浜は県庁にも近く湖岸の公園として整備され、岸ギリギリまでセーリングすることが可能です。抗議の意味合いを一般の方に広く訴えるには、目立つこと、またマスコミに広く捕えられることが必要です。そこで、ヨットハーバーの関係者以外にも学連、実業団、クルーザーなど、近隣のヨットハーバーの仲間にも幅広く呼び掛け、協力を求めました。また、ハーバー存続を求め、抗議の意思を示すのぼりを作成し、各艇に掲げました。

長谷川会長挨拶（開会式にて）

１２月６日、冬の西風が入る寒い日でしたが、なんと約１５０艇が集まりました。昼時の約１時間、におの浜湖岸沿いに２つのマークを打ち、その間をセーリングで往復するだけです。東行きは追手となり、岸沿いギリギリに帆走することで、湖岸からは 150 艇のヨットが目の前をパレードする大変壮観で美しい光景を演出することができました。

マスコミも地元ＴＶ局、主要紙、共同通信など多くの直接取材を受け、翌日の各紙で大きく報じられました。共同通信の取材により、全国各地の新聞でも取り扱われました。また、朝日新聞はヘリコプターを飛ばして取材、その航空写真が紙面を飾りました。

その効果は大変大きかったようで、嘉田県知事からも「ヨットの伝統は守っていく」との直接の言葉もいただきました。県関係者からは、今回のこともあり、早くに見直しが行われ、ヨットハーバー存続は確定し、今後の運営形態については県連が管理を受託する方向で調整が進んでいると聞きます。財政状況が厳しいのは事実であり、県から受けている補助金（年間約３００万

写真集のページへ

円とのこと）は基本無くす方向で運営をどうしていくか難しい課題もあります。我々利用者としては、よりセーリング競技が理解される中、その活動に合った柔軟な運用形態を求める所で、公営ではありながら、細かい規制に左右されず、箱物運営でない、利用者そして社会に根差したヨットハーバーにしていただきたいと念願する次第です。

今回のことで良かったこと、それは、日頃疎遠がちな学連やクルーザーの皆さんと方向を一つにし行動できたこと、思いが一つになると、大きな活動になるということです。参加者の感想をお伝えします。「初めて湖上デモなるものに参加しましたが、陸にいる人とも会話ができたり、「がんばれー」と手を振って声援をもらったり、日ごろは接点の無い学生さんと「楽しいね」と言い合ったり、楽しかったです。今回は、ハーバー存続を訴えるのが主旨でしたが、単純にこんな風なセーリングもいいなあと思いました。」

もう一点、気付いた事、我々も勝手に遊ぶだけでなく、社会に還元する行為も必要なのではないかということです。ヨットは滋賀県にふさわしい存在だと訴えるなら、具体的に社会との共存を示すべきではないかと。このセーリングパレードはその答えの一つになるのではないかと思いました。ヨットが優れている点は、見ていて美しい、景観面、環境面で訴求効果があるということです。その光景を演出すること、街を活性化する効果もあると思います。次回は是非のぼりなしでパレードできればと思った次第です。

最後に、イベント実施に際し、滋賀県セーリング連盟にご指導いただきましたこと、京都府セーリング連盟、学連、実業団、ジュニアヨットクラブ、クルーザー関係者にもご協力いただきましたこと深く御礼申し上げます。

文責：　青木英明（琵琶湖ヨット倶楽部）

湖岸のセーリングパレードを演出

# BYC カップ

## BYC CUP

月例のオープンレース。シングルハンド中心ですが、どの様な艇種も参加できるオープンレースです。気楽にヨットレースを楽しむ事が目的、参加者それぞれ、練習に、気晴らしに利用いただける気楽なレースがモットーです。

毎年３月から１２月の間、計１０日のレースを集計して得点を競います。短時間のレースですが、多い日で８レース程度は行いますので、年間では５０～６０レースは行うことになります。

また、昼ごろ集合で、午後１：３０からと遅く始め、短時間でショートレースを沢山行うというのも特徴です。

こういった、フリートレース活動は、BYC の原点ともいうべきもので、創設当時の５ｍ級、A 級の時代でも同様の活動が行われていました。

１９６０年後半、ヨーロッパモス級が西之園氏により日本に導入され、BYC、KYC を中心にフリート活動が始まりました。BYC 会長杯として始まったのがその原点ではないかと思います。

現在の運営の原型は 1990 年にレーザー柳ヶ崎フリートとして、青木英明氏、秋山紀夫氏等を中心に月例レースを年間を通して開催した、Biwako Singlehand Dinghy Racing です。短時間に集中したレベルの高い練習レースとなり、シングルハンダーの輪が大きく広がりました。

シーズン表彰式　2010 年 4 月

以降、レーザー級の活動が活発となり、かつてのヨーロッパ級と同様、琵琶湖地域開催のレースを多く主管するようになりました。

レーザー級での会員の活躍は目覚しく、秋山紀夫氏は全日本で２度タイトルを取得、1994（H6）年和歌山で開催された、レーザーマスターズ世界選手権で優勝するなど活躍しました。

現在のクラブ員の大半は、レーザー級でレースを楽しんだ仲間です。この延長で 2002 年以降、BYC の主催行事としてトロフィーを作り、レーザーフリートレースが引き継がれた形になります。もちろん受入はオープンで誰でも参加できます。

## ■ 米国フリートレース運営形態を導入　　青木　英明

１９８８年～１９９０年の間､青木（英）氏が米国駐在でコネチカット州ウエストポートの Ceder Point Yacht Club で行われていた Laser Frostbite Series に参加、毎日曜、午後からのショートコースレースを体験、９０年に帰国後、柳が崎で、この運営方法を真似して始めたのが、Biwako Singlehand Dinghy Racing。これが、今の BYC　CUP の運営形態になっています。

会社員で家庭もあり、日曜日といえども、終日を費やすスケジュールでは、実際人は集まらず、続きません。気合いを入れるレースではなく、普段着でヨットレースを楽しむ場を、

ということで、午後からの短時間設定で行っています。

運営も一人でも運営できるよう、面倒で、良く間違えるフラッグはなし、音響信号のみで簡易的に運営します。

写真集のページへ

2008 年 5 月

2008 年 5 月

2008 年 5 月

2008 年 5 月

2008 年 10 月

2008 年 10 月

2008 年 10 月

2008 年 10 月

2010 年 12 月

2007 年 10 月

BYC CUP のシーン

## ■ 米 Ceder Point Yacht Club との交流（2006-2007）

2006 年 11 月に米国から Daniel Lent 氏が訪れ、11/26 の BYC CUP に参加いただきました。先般彼より、5 月 6 日に開催された、彼が所属する Cedar Point Yacht Club（CPYC、米コネチカット州）の Commissioning Day Ceremony（運営役員がフラッグポール下に集まり、会長の念頭方針や新役員の紹介等が行われる年初のオフィシャルセレモニー）において、彼に贈呈した BYC のフラッグが、正式に CPYC に贈呈され、ＢＹＣのことが紹介されたと報告がありました。代わりに正式交換された CPYC のフラッグ (burgee) が送られてきました。CPYC の会報にその様子が写真入りで報じられていますので、紹介いたします。

Commodor e little accepted from Dan Lent a Biwako Yacht Club burgee, which had been given to Dan during a visit to Japan by Hideaki Aoki. Hideaki was a CPYC Laser frostbite sailor in the late 80's when Danny was also first frostbiting at CPYC. Biwako Yacht Club is the oldest yacht club in Japan and is located on Lake Biwa near Kyoto where many one design dinghy classes race. The Biwako officers invite any CPYC Laser sailors to visit their club and go sailing. Commodore Little in return presented a CPYC burgee and asked Dan to “send it to Hideaki and the Biwako Yacht Club with our thanks and warmest regards.”

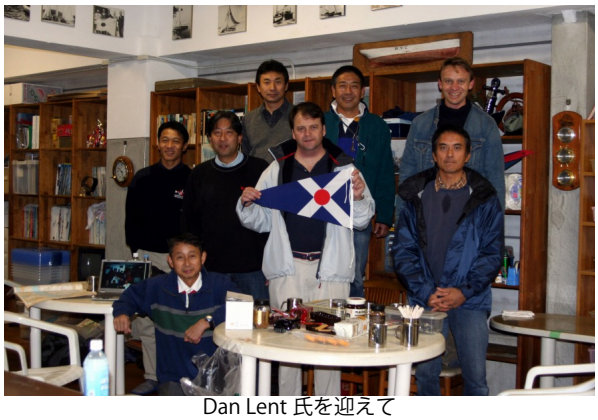
《CPYC の会報　"THE BULLETIN" から抜粋》

【訳】会長のリトル氏は琵琶湖ヨット倶楽部のバージをダン・レントから贈与を受けました。これはダン氏が日本訪問中青木英明氏から受け取ったものです。青木氏は 80 年代後半に CPYC で Frostbit に参加したセーラーで、当時ダンは CPYC の Frostbite に初参加した頃の事だそうです。琵琶湖ヨット倶楽部は日本で最も古いヨットクラブで京都に近い琵琶湖に位置し、多くのワンデザインディンギーのクラスレースが行われています。BYC のメンバーは CPYC のレーザーセーラーをいつでもセーリングに招待してくれるとの事です。リトル会長はお返しに CPYC のバージを贈呈し、青木氏と琵琶湖ヨット倶楽部に感謝と敬意を伝えるようダンに託しました。

【写真訳】Commissioning Day Ceremony において、ダン・レントより琵琶湖ヨット倶楽部のバージがリトル会長に贈呈された。

Dan Lent presents Biwako YC burgee to Commodore Little at the Commissioning Day ceremony

BYC CUP 後に記念撮影
長谷川会長が持っているのが CPYC のバージです



Dan Lent 氏を迎えて

# Austria への遠征

## Classic Yacht Week in Austria
## 2010 年 7 月

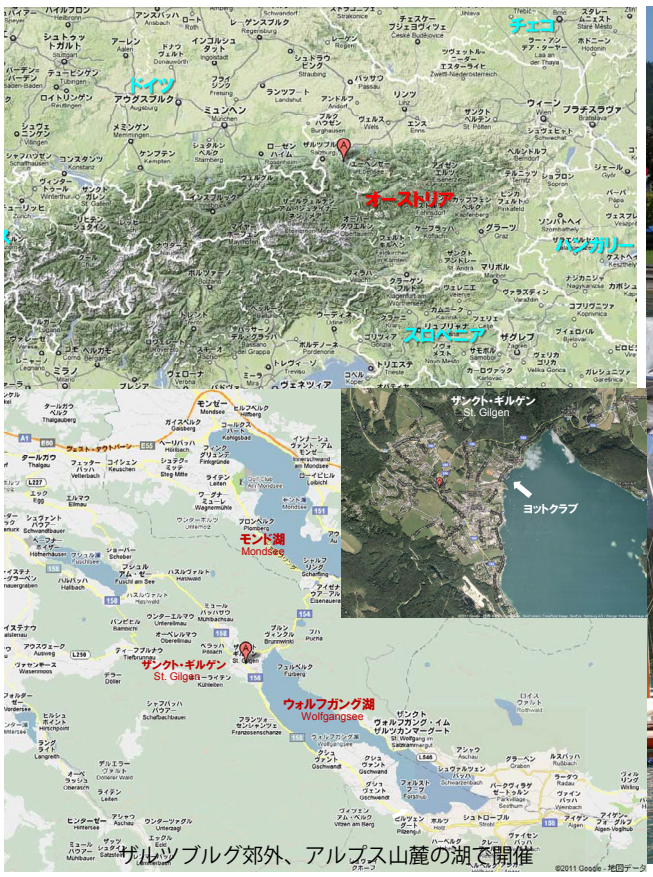
BYC が所有している EZ がきっかけで、オーストリアのヨットクラブと深いつながりが出来ました。ＥＺは戦前、ドイツ、オーストリア地区で発達したレースクラスですが、その復元・保存を進めている Artur Vlasaty 氏がＢＹＣのホームページで日本でのＥＺの存在を見つけたのがそのきっかけです。彼からメール連絡を受け、ＢＹＣのＥＺのルーツを知らせたところ、感動し、艇を見に来日しました。

2010 年夏、彼からオーストリア、ザルツブルグ近郊の湖、ウォルフガング湖で開催された、オーストリア・クラシック・ヨット・ウィークへの参加の誘いを受け、長谷川会長以下 4 名で遠征を行いました。

我々は、ＥＺの同型艇とオリンピアヨレ級をチャーターし、レースに望みました。

強風下トラブルもあり、レース結果は芳しくありませんでしたが、同じクラシックボートを大切にしているヨットクラブとして最大級の歓迎を受け、深い交流へと発展、素晴らしい体験となりました。

チャーターした EINHEITS ZEHNER ウォルフガング湖でのセーリング




ザルツブルグ郊外、アルプス山麓の湖で開催

Union Yacht Club Wolfgangsee

ヨットクラブ桟橋からウォルフガング湖を望む

LGT Sailing Cup

Wealth Management

Internationale
Österreichische
Traditions-Segelwoche 2010

大会ポスター

LGT Sailing Cup

Wealth Management

PROGRAMM:

*Donnerstag 22. Juli 2010*

| | |
|---|---|
| 9.00 Uhr bis 15.00 Uhr: | Eintreffen der Teilnehmer<br>Kranen (nach schon Tage vorher möglich) |
| 15.00 Uhr: | Registrierung<br>Begrüßung und Eröffnung<br>Flaggen hissen |
| 15.30 Uhr: | Geschwaderregatta nach St. Gilgen<br>Flaggenparade an Land |
| ab 19.00 Uhr: | Begrüßungsabend im Club |

*Freitag 23. Juli 2010*

| | |
|---|---|
| 10.00 Uhr:<br>ab 19.00 Uhr: | Start zur ersten Wettfahrt<br>LGT Galadinner im Hotel Gasthof zur Post, St. Gilgen |

*Samstag 24. Juli 2010*

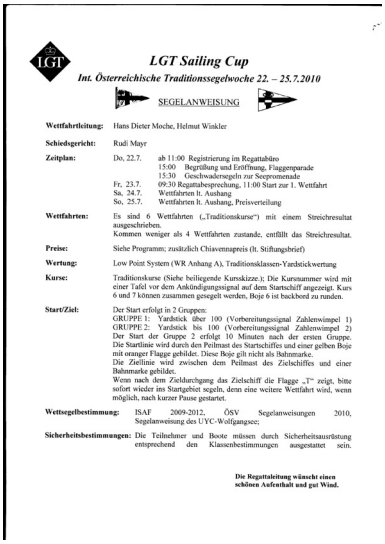
| | |
|---|---|
| 7.00 Uhr:<br>ab 19.00 Uhr: | Start zur Wettfahrt<br>Abendessen im UYCWs - Stegparty |

*Sonntag 25. Juli 2010*

| | |
|---|---|
| 9.30 Uhr: | Jazz-Frühschoppen<br>Auslaufbereitschaft laut Aushang,<br>Siegerehrung 1 Stunde nach Ende der letzten Wettfahrt |

Internationale Österreichische
Traditions-Segelwoche 2010
22. bis 25. Juli 2010 St. Gilgen - Wolfgangsee

大会プログラム



LGT Sailing Cup

*Int. Österreichische Traditionssegelwoche 22. – 25.7.2010*

SEGELANWEISUNG

**Wettfahrtleitung:** Hans Dieter Moche, Helmut Winkler

**Schiedsgericht:** Rudi Mayr

**Zeitplan:**
Do, 22.7. ab 11:00 Registrierung im Regattabüro
15:00 Begrüßung und Eröffnung, Flaggenparade
15:30 Geschwaderregatta zur Seepromenade
Fr, 23.7. 09:30 Regattabesprechung, 11:00 Start zur 1. Wettfahrt
Sa, 24.7. Wettfahrten lt. Aushang
So, 25.7. Wettfahrten lt. Aushang, Preisverteilung

**Wettfahrten:** Es sind 6 Wettfahrten („Traditionskurse") mit einem Streichresultat ausgeschrieben.
Kommen weniger als 4 Wettfahrten zustande, entfällt das Streichresultat.

**Preise:** Siehe Programm; zusätzlich Chiavennapreis (lt. Stiftungsbrief)

**Wertung:** Low Point System (WR Anhang A), Traditionsklassen-Yardstickwertung

**Kurse:** Traditionskurse (Siehe beiliegende Kursskizze.); Die Kursnummer wird mit einer Tafel vor dem Ankündigungssignal auf dem Startschiff angezeigt. Kurs 6 und 7 können zusammen gesegelt werden, Boje 6 ist backbord zu runden.

**Start/Ziel:** Der Start erfolgt in 2 Gruppen:
GRUPPE 1: Yardstick über 100 (Vorbereitungssignal Zahlenwimpel 1)
GRUPPE 2: Yardstick bis 100 (Vorbereitungssignal Zahlenwimpel 2)
Der Start der Gruppe 2 erfolgt 10 Minuten nach der ersten Gruppe.
Die Startlinie wird durch den Peilmast des Startschiffes und einer gelben Boje mit oranger Flagge gebildet. Diese Boje gilt nicht als Bahnmarke.
Die Zielline wird zwischen dem Peilmast des Zielschiffes und einer Bahnmarke gebildet.
Wenn nach dem Zieldurchgang das Zielschiff die Flagge „T" zeigt, bitte sofort wieder im Startgebiet segeln, denn eine weitere Wettfahrt wird, wenn möglich, nach kurzer Pause gestartet.

**Wettsegelbestimmung:** ISAF 2009-2012, ÖSV Segelanweisungen 2010, Segelanweisung des UYC-Wolfgangsee;

**Sicherheitsbestimmungen:** Die Teilnehmer und Boote müssen durch Sicherheitsausrüstung entsprechend den Klassenbestimmungen ausgestattet sein.

**Die Regattaleitung wünscht einen schönen Aufenthalt und gut Wind.**

帆走指示書

チャーターした "N-Jolle"(EINHEITS ZEHNER)

写真集のページへ

来日した A. Vlasaty 氏　2009 年 1 月

BYC の EINHEITS ZEHNER　2010 年 7 月

チャーターした同型艇

主催者 k.u.k. 王宮ヨット協会　Holler 会長（右）と

旧王室ハプスブルグ氏（右）と

表彰式にて

京都新聞　2009年（平成21年）1月30日　金曜日

大津拠点の琵琶湖倶楽部

# 「幻の設計図」が結ぶ交流

ウィーンのユニオンクラブ

## 提供受け、感謝の湖国入り

### 独の名ヨットＥＺが縁

### 「日本に現存、奇跡」

「幻の図面をありがとう」。ドイツで設計された戦前の木造ヨットをめぐり、同型船を持つオーストリア・ウィーンの「ユニオンヨットクラブ」の関係者が二十九日、大津市の琵琶湖ヨット倶楽部を訪問した。欧州では入手困難な設計図のコピーを昨年末に郵送した同倶楽部に感謝の気持ちを表すためで、両国のヨットマンは今後も交流を続けることを約束した。

EZを挟み、今後の交流を誓い合ったブラサティさん（左）と青木副会長（大津市・県立ヨットハーバー）

同クラブは一九〇八年設立で、同倶楽部より十四年古い歴史を持つ。ウィーンの西三百キロにある湖が拠点で三百人の会員がいる。訪問したのは、不動産業アートウアー・ブラサティさん（40）。世界で数少ないドイツ製木造ヨットの情報収集やレース復元に取り組む中、同型船（EZ）を持つ同倶楽部とメールで交流を始め、ハワイへの休暇途中に日本に立ち寄った。

大津市柳が崎の県立ヨットハーバー艇庫で青木英明副会長にクラブ旗を手渡し、EZの説明を受けたブラサティさんは「日本にこの船があるのはミラクルだ」と興奮。「第二次大戦で散逸した船や設計図を大切に保管していることを尊敬します。同じ船を持つ者として、今後も人の交流や情報共有を進めたい」と笑顔で話した。

第３種郵便物認可　京都新聞

# 木造ヨットの縁 世界へ出航

琵琶湖ヨット倶楽部

大津市の「琵琶湖ヨット倶楽部」のメンバー4人が、戦前の木造ヨットを通じて交流しているオーストリアのヨットクラブから招待を受け、22日から同国で始まったクラシックヨットの大会に出場している。メンバーは、1台の木造船が取り持つ縁に感謝し、「歴史あるクラブに大事な足跡が残せる」と喜んでいる。

### 70年以上前に建造、保管

## 交流のオーストリアにレース招待

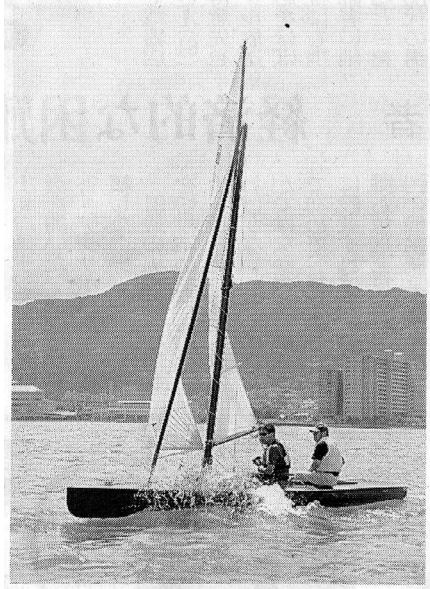
一昨年、木造ヨットの情報収集をしているオーストリアの「ユニオンヨットクラブ」関係者が、同倶楽部所有の木造ヨット「アインハイツ・ツェーナー」（EZ）の存在を知って同倶楽部に連絡してきた。同倶楽部が保管しているEZの設計図が欧州では入手困難なことが分かり、コピーを送ったことから交流が始まった。

今年5月、同倶楽部の青木英明副会長（51）の元に、7月22～25日にオーストリアで開かれるクラシックヨットの大会への参加を呼びかけるメールが届いた。1950年以前に建造もしくは設計されたヨットだけが出場する大会。同倶楽部のメンバー4人で参加を決めた。

同倶楽部所有のEZは70年以上前の建造。年1回、ヨットレースで琵琶湖を疾走するが、ニスを塗り直したり、木と木の継ぎ目をうめるなど手入れが大変という。同倶楽部の長谷川和之会長(79)は「こういう機会に恵まれたのは先人が大事にヨットを保管してきたから」と感謝する。

大会で現地のヨットマンが所有するEZと同型のヨットに乗る。メンバーは出発前に琵琶湖でEZに乗って感触を確かめた。青木さんは「アルプス近くの湖に古いヨットが何十艇も並ぶ姿は想像しただけで楽しみ。景色もレースも楽しみたい」と話していた。

（逸見祐介）



水しぶきをあげて琵琶湖を疾走する琵琶湖ヨット倶楽部所有の「アインハイツ・ツェーナー」。あめ色の重厚な船体がひときわ目をひく

京都新聞　2010/7/23

## ■ 素晴らしき帆走艇たち　オーストリア国際クラシックセールウィーク

J-Sailing 誌から抜粋
（2010 年 10 月）

レポート / 青木英明・琵琶湖ヨット倶楽部
Photo by Lois Nagl

2008 年 11 月、オーストリア・ウィーン在住のアートァ・ヴラサティ氏から突然Ｅメールが送られてきました。「貴クラブのホームページにアインハイッツツェーナー（Einheitszehner）級の写真があるが、この歴史的なクラスの調査をしており、連絡を取りたい」との内容。この手紙がきっかけで話は思わぬ方向へと進展しました。そのいきさつをご報告します。

琵琶湖ヨット倶楽部（ＢＹＣ）が保有するアインハイッツツェーナー級（以下ＥＺ級）のルーツは、当時のクラブ員、故吉本善太氏がベルリンオリンピック（１９３６年）に出場した際、欧州のレーシングヨットに魅せられ、ドイツから図面を取り寄せ、１９３９年に日本で建造したものです。

ＢＹＣのクラブ艇として現在も帆走可能な状態で保管しており、年に１度の「ＳＡＩＬおおつ」でその雄姿を披露しています。この経緯を伝えると、先方では手元に図面がないとのこと。早速、図面のコピーを送付して、交流が始まりました。驚くことにヴラサティ氏はすぐに来日して艇を確認、ほぼオリジナル設計のまま保管された大変貴重な存在であることに感嘆、彼のホームページでもこのＥＺを詳しく紹介しました。その後、図面はＥＺの故郷であるベルリンのボートショーで飾られるなど話題となったそうです。

戦前のドイツ・オーストリア地区で帆面積別のレースが活発に行われていたころ、造艇競争が活発となり、その中で勝ち残り規格化されたクラスのひとつがＥＺ級でした。ＥＺ級はもっとも小さなクラス（通称Ｎクラス：10 平米）で、他に 15 平米（M）クラス、20 平米（Z）クラス、22 平米（J）クラスなどがあったそうです。

（思わぬお誘い）

そのヴラサティ氏から、「この７月 22 ～ 25 日に LGT Sailing Cup (Internationale Österreichische Traditions-Segelwoche 2010) 国際オーストリア・クラシック・セールウィーク２０１０というレースが開催される。一緒にレースに参加しないか」との誘いを受け、ＢＹＣの長谷川会長、松田、森、青木の４人で出かけることになったわけです。

レースは k.u.k. Yacht Geschwader（王宮ヨットフリート）が主催し、開催地はオーストリア・ザルツブルグ近郊のザルツカンマングート地区に点在する複数の湖のクラブ。毎年、ホストクラブをかえて開催され、今年はウォルフガング湖（Wolfgangsee）畔のザンクト・ギルゲン（St. Gilgen）という小さな街にある、ユニオンヨットクラブ・ウォルフガングゼー（Union Yacht Club Wolfgangsee：UYCW）がホストでした。ここはモーツァルトの母親が暮らした街として有名で、避暑地でもあります。

ウォルフガング湖を帆走するクラシックヨットのＳクラス

参加艇の条件は、基本的に１９５０年以前の艇（以降の艇でも以前の建造手法のものに限る。アルミマスト、ダクロンセールはＯＫ）であること。日本で知られている艇としてはドラゴン級がありますが、他は見られない艇種ばかりです。

多くは波のあまり立たない湖水で発達した艇種で、フリーボードが低く、ビームは狭く、細長いハル形状が特徴です。中でも最大のソンダークラッセ級は艇長約 40ft、セール面積 51 平米という巨大なキールボート。多くはガフリグの木造艇で、この船がセーリングする姿は「美しい」の一言です。

このようなクラシックボートが近隣のドイツ、スイスからも 42 艇が集まり、レースが繰り広げられました。これらがいっせいにレースをする光景は、まるでタイムマシンに乗って時代を遡ったのではないかと思うほどで、夢心地にさせてくれるものでした。どの艇も木造ニス塗りでピカピカに整備された、それはそれは美しいまさに工芸品ばかりです。

我々はヴラサティ氏の配慮で、10 平米クラスのＥＺ級を借りて青木・松田が乗艇。またベルリンオリンピックに採用されたオリンピアヨレも借り、森が乗艇してレースに参加しました。

（最大級の歓迎）

イベントはオープニングセレモニーから始まりました。旧王室に関係する組織が主催し、旧王国時代の伝統的な軍隊様式で進められました。旧王室ハプスブルグ家ファミリーも出席され、伝統的な音楽が演奏される中でのフラッグセレモニー。ホストクラブのＵＹＣＷ旗、参加国のオーストリア、ドイツ、スイス、そして日本の国旗が掲揚され、そこに王宮ヨット協会のフラッグが運ばれ、掲揚されます。陸上式典の後はハーバー前でのセーリングパレードです。ヨットハーバーの桟橋からは大砲の礼と旧軍隊

ＢＹＣから遠征した（左から）森、長谷川会長、松田、青木の４氏

10 平米ＥＺ級に乗る青木（右）・松田チーム

Ｓクラスのスタートのシーン。Ｓクラスは Halsey Herreshoff の設計によるもので、世界で初めてマルコニーリグのワンデザインボートとして誕生した。全長 max13.2m、幅 2m、水線長 5.75m、排水量 min1950kg、セール面積 max 51 平米の要目を持つ。BYC の長谷川会長もこのＳクラスの 1 艇 <CIMA> に乗艇しパレードに参加したが、それは過去に米国タフト大統領や、ドイツのウィルヘルム皇帝を乗せた船齢 100 年の由緒あるボートだったという

の敬礼を受けます。

２日目からレースが始まりました。レースは、艇種別にヤードスティックナンバーをつけ、混合タイムハンディキャップ方式で行います。フリートは２クラスに分かれていっせいにレースをします。レース海面は幅の狭い湖で、６つの固定マークを複雑に回航するコース図が与えられ、風に合わせて本部船から指示されます。山あいの地形で風のシフトは激しく、岸沿いの風の振れなどが特異でコース取りが難しく、我々は風の振れを味方にすることは最後までできませんでした。

３日目のレースではスタート直後にブローを受けて沈をしてしまいました。オープンデッキのため、水船になると再帆走できずやむなくリタイヤ。最終日も強風コンディションでしたが、レース完走を目指して慎重なセーリングでなんとかフィニッシュしました。

成績は残念な結果でした。でも、オリンピアヨレで出た森選手は、強風の中でも日頃のレーザーでの腕前を生かし、総合 27 位とまずまずの健闘ぶりでした。

オフィシャルパーティは、ドレスコード付きのフォーマルなものです。街のホテルを借り切り盛大なパーティが繰り広げられました。我々はさまざまな機会に日本のＢＹＣからはるばる来てくれたと紹介を受け、最大級の歓迎を受けました。旧王室ファミリーの方と話をする機会にも恵まれました。人生の楽しみ方まったく縁のない中央ヨーロッパの伝統と生活に根差した祭典に飛び入りし、地元のヨットクラブに４日間どっぷりと浸る中、彼らのヨットクラブライフの素晴らしさを感じることができました。生活の質の高さ、人生を楽しむというのはこういうことなのでしょう。彼らは同じルーツの古いボートを大事にしている仲間として、我々を最大級の礼で迎えてくれました。本当に夢心地で貴重な経験をすることができました。生活習慣が大きく違いますが、古いヨットを大事にするという共通項で深い交流ができるということが、本当に味わいのある大人の趣味だと感じました。ＢＹＣの所有艇もまだまだ整備状況は甘く、根本的な補修も必要です。この機会に重い腰を上げ、再整備しなければと思った次第です。

日本にオールドボートは多くないかもしれませんが、このようなイベントでコミュニティを作り、連携を深めていくことは重要ではないでしょうか。小生が知っている範囲では、毎秋サントピアマリーナで開催されている「ウドゥンヨットレース」がありますが、大変素晴らしい取り組みだと思います。

写真集のページへ

開会式

チャーター艇の艤装

Artur Vlasaty 氏の EZ

チャーターしたオリンピアヨレ

オリンピアヨレ（森）

クラブハウスにて

Einheits Zehner (N class)

Olympiajolle

Vlasaty 夫妻、オリンピアヨレのオーナー家族と

Union Yacht Club Wolfgangsee 会長と